

## JICAの研修を踏まえ 現地調査へ

「マーチエー（こんにちは）」。  
2008年2月、ガーナ中西部アシヤンティ州のクワベナアクワ村に到着したNPO法人ACE事務局長・白木朋子さんは、強烈な日差しと暑さにもめげず、村人のもとへと駆け寄った。訪問の目的は、貴重な働き手である子どもたちの労働環境や学校教育の現状を調査すること。期間は約1カ月間。調査は、JICA地球ひろばが、若手NGOスタッフの人材育成と組織強化を目的に実施する「NGO人材育成研修」の一環で行われた。開発途上国でのプロジェクトの進め方などを学ぶため、07年から白木さんも参加したこの研修。現地ニーズの確認やインタビュースキルといった調査手法を学習し、その後、海外で調査を実践することになっていった。

ガーナは、チョコレート原料となるカカオ豆の主要生産地の一つ。日本は消費量の約7割をこの国から輸入している。しかし近年、生産の担い手である子どもたちの児童労働の問題が、国際的にも議論されている。ガーナを含む西アフリカ4カ国では、危険な環境の中、数十万人の子どもたちが学校にも通えず、カカオ農園で働いているという。日本での研修中は、NGO活動や開発援助の現場経験が豊富な講師か

NPO法人ACE 事務局長  
Shiroki Tomoko

## 白木 朋子さん



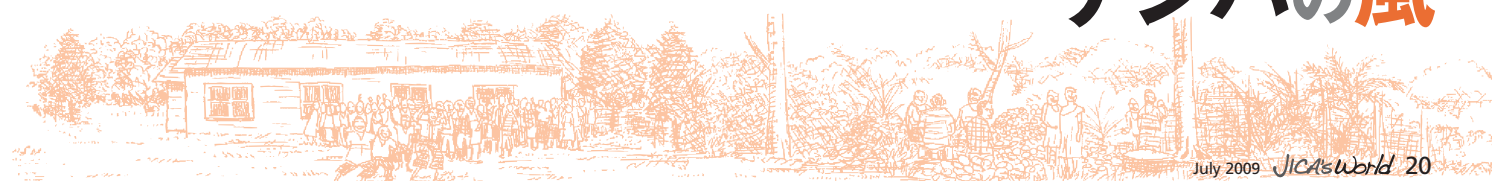
白木さんは、1カ月間の調査でたくさんの子どもたちや村人と触れ合い、対話を重ねた。「チョコレートは人々を幸せにしてくれる。だからこそ、カカオ豆を作る彼ら自身にも幸せになってほしい」

## 「危険な労働から子どもたちを解放したい」

児童労働の撤廃と予防に取り組むNPO法人ACEの事務局長・白木朋子さん。JICA地球ひろばの「NGO人材育成研修」での成果をもとに、カカオ豆の生産で過酷な労働を余儀なくされているガーナの子どもたちを支援しようと、現地調査に臨んだ。

第8回

## ゲンバの風



「何歳から働き始めたの?」「どういった作業をするの?」クワベナアクワ村の小学校で、子どもたちに聞き取り調査をする白木さん(右)

らアドバイザーを受けながら、調査の目的や進め方を整理し、その上で現地向かった白木さん。調査終了後は、その結果をもとにプロジェクトを立ち上げ、村の子どもたちを危険労働から解放したいと考えていた。「私たちがチョコレートを喜んで食べているその裏には、児童労働という悲しい現実がある。子どもたちが健全な環境で成長できるような力になりたい、その思いに突き動かされたんです」。

## 日本人とも無関係ではない 児童労働

「子どもたちがどんな環境で働き、どんな思いをしているのか確かめたい」。そう考え、調査では子どもたちの生活に密着した。

朝5時半、彼らの1日は水くみから始まる。満水のポリバケツを井戸から運んだ後、朝食を済ませ1時間

ほど歩き学校へ。小学校は校舎の壁が壊れ教科書も不足している。併設されている幼稚園ではたくさんの園児が元気に遊ぶが、学年が上がると農園作業に駆り出され、児童の数は減っていく。

カカオ農園で子どもたちが担う作業は、収穫から運搬、草取りなどさまざま。高い所になった実を落とすには、先端に鋭利な刃が付いた長い竹の棒を使うが、ときには刃が落ちてけがをすることも。また、実は硬く、刃物で割って中の豆を取り出す作業はとても危険だ。

収穫後、1週間発酵させた豆をかごに入れて頭に載せ、長い道のりを自宅へ運ぶ。その重さは約20キロ。担いでみると、ずっしりと重い。「何度かかごを運ぶので体が痛い。だから痛み止めの薬を使っているの」。白木さんにそう訴える少女もいた。ほかに、農薬散布やまき割りなど子どもには危険な作業が多い。

親への聞き取りでは、生きていくために、やむを得ず子どもたちを働かせている現状が見えてきた。「ここではカカオ豆に収入を依存している。学校には通わせたいが、子どもたちの手がなければ、生きていくことができないんです」。(白木さん) 「いかに人々の本音や、問題の本質を聞き出すかが重要」という研修での講師の言葉を思い出し、子どもた

ちや親、住民との対話を重ねた白木さん。すると、プロジェクトの目指すべき姿が見えてきた。そして現地のNGOの協力のもと、①危険労働を防ぎ就学を徹底させる、②学校環境を改善する、③子どもが働かなくて済むよう効率的なカカオ豆の生産技術を指導する、の3点を柱とする「スマイル・ガーナプロジェクト」の実施を決めた。

その後、準備を経て、プロジェクトは09年2月にスタート。現在は、現地のNGOを通じ、危険労働を防ぐための住民への啓発、子どもたちの出席状況のモニタリングなどを行っている。「いずれ、村のカカオ豆で作ったフェアトレードチョコを日本で販売し、住民の生計向上に貢献したい」。

普段は日本国内を走り回り、イベントやワークショップ、講演などで児童労働の現状を訴え、プロジェクトの資金を募っている白木さん。「輸入されているさまざまな食べ物や製品に、児童労働が深くかかわっています。だからこそ、私たちにできることは多い。それをたくさんの人に知ってほしい」。

児童労働問題にける白木さんの思いが、研修への参加を通して形となり、プロジェクトとして大きく動き出した。子どもたちが危険な労働から解放され、笑顔で学校に通える日まで、白木さんは走り続ける。

### しろきともこ

1974年宮城県出身。英国サセックス大学・文化開発環境研究センター開発人類学修士課程修了。97年大学在学中にACEの立ち上げに参加。開発コンサルティング企業に勤務しながら、児童労働啓発キャンペーンの企画運営、ワークショップ講師、執筆などを行う。2005年4月より現職。児童労働ネットワーク運営委員。



約600人が暮らすクワベナアクワ村では、すべての家庭がカカオ豆を生産しており、農園で仕事を手伝う子どもたちの姿が目立つ

ガーナでの調査結果を報告する白木さん(左)。「日本の人々に児童労働の現実を伝えていくための場も、私たちにとっては大事な“ゲンバ”です」

